

第 8 回 (11/26) 自分らしさと個性

(諏訪哲二、2005、『オレ様化する子どもたち』中公新書ラクレ)

1. BBS 投稿から

「相手に踏み込まないという事で気付かぬうちに自分が傷つかないという選択をしているのだと思う。浅い関係でいる事で自分も相手も嫌な思いをせずその場をやりすごせるのだと思う。1 人になるのが嫌だからとりあえずこの人と一緒にいる。お互いそういった考えがあるのだと思います。」

「相手に自分の考えを素直に伝えることで相手に不快感を与えてしまうかもしれない。それを避ける一つの方法としてそのときの周囲や相手の精神的状況などによって自分の考えを直接的に伝えるべきか間接的に伝えるべきか選択し、相手との人間関係を良好に保つよう努めている。」

「私自身、友達にも気を使って生きていく気がする。授業で、「ぼかし表現」という言葉が出てきたが、私は、これをよく使うと感じた。」

「年齢が上がるにつれ友達と衝突することが減っていったので、それによって傷ついたり関係が悪くなることもなくなったが、ぼかし表現など本音ではない当たり障りのないことをいう機会は反対に増えたと思う。」

「…グループでうまくいかないと終わりとか考えるのは、考えるだけ無駄な気がする。確かに気持ちが分からなくもないが、本当に気の合う人なんかこの世に他にもいるだろうし、気を使って接するくらいなら 1 人の方が楽だと考えてしまう。お互い息が詰まるような関係ではなく、理解しあえていい意味で気を使う関係がいいのではないか。」

「友人の希薄化とは、たんに「友人」のカテゴリーが拡大し、従来の友人概念も残しながら…」と書いてあるが、そもそも「友人」の範囲がどこまでを指すのか分からない。特にいつも仲良くしているわけではないが他人でもない人や、クラスメイト、また、それに近い関係も「友人」とする場合もある気がする…。」

「友人関係の希薄化に関して…相手に傷つけられることを恐れて、つきあいを表面的なものに止めようとする傾向とあるが、昔の、昭和の不良？ヤンキー的なグループとかは傷つけられることなんて恐れずに相手に真っ向から立ち向かい、仲間内では仲間同士でお互いに身体に傷を付けたりして仲間意識が深い、信頼が厚いというものもあったのかな？と思った。それを思うと希薄化しているというものもあるのかもしれないと思った。」

「相手と心から繋がりたい、一緒にいたいならば、自分の弱い部分を互いにさらけ出しすり合わせていくのが大切だと考えました…。」

「互いに傷つかない様を選択したり、浅い付き合いがあることは決して悪い事じゃないし昔の人もきっとそうしてきたと思う。SNS の普及で多少は変わってきているところもあると思うけど友達付き合いの仕方はそこまで大きく変わることはない気がする。」

「現代では SNS が普及し、対象の人を除いたグループや裏垢などで表立って言えないような悪口、愚痴を対面ではないため罪悪感なく気軽に言いやすい環境にあり、実際そのようなものをよく目にする。それらを恐れて衝突を避けるような言動・行動をとるというのも優しい関係を築こうとする一つの要因ではないかと思う。」

「SNS の発達でいつでもどこでも友人と繋がれるので、希薄化はしていないと思う。しかし、相手を気遣ってぶつからないようにしている面はあると思う。私は幼稚園は小学校の頃は友人とよく喧嘩をしていたが、中学生頃から友人と喧嘩をした記憶が無い。空気を読まずに発言をしたり衝突することで友人関係を壊したくないという思

いがあるからだ。自分の意見は心の中に留めておいて相手の意見に表面上の賛成をすることも多い。」

「「選択化論」の説明の中で様々なタイプの友人が場面に応じて選択的に使い分けられている、とあったが、それは当たり前的事ではないかと思った。どれだけ普段仲が良くても趣味が違えば話も合わないの、趣味に関しては別の友人と話す、などよくある事なのではないだろうか。」

「現代の友人関係における選択化論に同意する。昔は地域全体で子どもを育てていたため、共同体意識があり1つのまとまりとしての関係を作っていた。しかし現在は各家庭で育てるため共同体意識がなく、自分と外のつながりごとに関係を作るのではないか。」

「人と衝突することは異常なことでは無いと思う。私は逆になんでも共感されると意思がなく話を聞いているのかな？と疑問もなる。人と人が関わる以上衝突は避けられない時には必要だと思う。」

「相手と深い関係を築いていく上で衝突は避けられないと思う。相手に同調し続けることも悪くはないと思うが、相互理解を深めるには衝突するべきなのではないだろうか。」

「周囲の人と衝突することは、この世界に生きていたら当たり前のように存在していることだと思う。いろんな環境で育ってきた私たち1人1人はそれぞれの価値観のもと生活を日々行っていて、そこでおこる衝突のようなものは人間である証のようにも感じる。相手に意見を言わなくてはならない時も生きていけばあると思うと同時にその行為によって良い人間関係が築けると思う。」

「人と関わることで衝突は起こり得るはずだから、私は周囲の人間と衝突することは異常な事態だと思わない。みんな同じ意見なことはないし、それぞれ違った意見があるからこそ良い物が作れるはずだと思う。」

「人と衝突することは異常なことではないと思うけど、めんどくさいから避けがちだなとは思った。初めて接触する人とかに対してはやっぱり変に思われないうちに自分を作る。関わっていくうちにこの人は信頼できるな、とかこの人は信頼できないなという風に見極めて、信頼出来そうな人だけに本当の自分を曝け出したら良いと思った。」

「友達同士で衝突する事は異常とは感じない。基本ないものだと思ったいるが、それぞれの価値観があるので衝突する事は仕方ないことだと思う。ただ、衝突すると後がめんどくさいので、みんな多少は気を使ってるのだと思う。思った事をそのままさらけ出して貫くのは一歩間違うと自己中心的だと思われてしまうのである程度は気を使った方がいいと思った…。」

「衝突は異常ではない。避けたい気持ちはよくわかるけど、衝突するのは仕方ない事だし必要な時だってある。演じる時とさらけ出す時のバランスが必要だと感じているから人間関係の選択化や希薄化が起こるのではないか。」

「人と関わっていく上で、気を遣うことも必要だ。でも気を遣ってばかりだと自分自身が疲れてしまう。相手のことを考え、相手のために思って行動する、何かを言う、ということはお互いの衝突を避けることはできる。でも自分の負担を考えたら、そればかりをしているわけにはいかない。適度に人と付き合っていくには、ちょうどいい距離を保っていくべきだと思う。」

「チームワークが大事な部活などだったら、正しい道に行くように自分の意見をハッキリ言い合い、衝突するのがいいと思われるがクラスメイトなどと衝突するとなると周りの目が気になるし言いたいことも言えずに陰口に繋がることが多かった。」

「友人関係間での衝突について。講義では異常と感じなかったが、振り返ってみると友人関係間の同調圧力に逆らって衝突しグループから弾き出された人に遭遇したことがあった。無意識のうちに「共感必須・衝突は異質」といった考えが蔓延していたのかもしれない。」

ほか多数

過去の投稿から

「仲間以外は皆風景について。きっと「自分」という人間は皆、他人は風景と思っているのではないだろうか。例えば自分が何かに集中している時は他のことはあまり気付かないことが多い。もしその時に言葉で相手を傷付けていたとしてとずっと気付かないと思う。そういった自分勝手な行動が相手から風景と捉えられてしまうのではないかと考えた。」

「友人関係について。授業内で、現代の若者の人間関係は希薄化しつつあるというバッシング論について話し合った。とても仲の良い友人とお互いのことをあまり知らない友人がいたとする。自分は、お互いのことをあまり知らない友人に対して、自分のことを理解して欲しいと願う。しかし、自分を理解してもらおうとするための努力はしていないということに気付いた。」

「現代の若者のコミュニケーションについて何でも SNS のせいにしてしまうのは安易かもしれないが、やはり自分が実際に声に出さなくても誰かと簡単に繋がるのが可能になって、さらにそのネット上での繋がりには現実よりも固いものとなりうる SNS は、グループ化を促進させるツールであることを否定できない。」

「今まで過ごしてきた時間の中で関わった多くの人たちと私たちは繋がっている。しかし、それは表面的であり本当の自分ではない。…中学や高校で仲が良く、信頼関係をしっかりと築いた友人と進学を機に連絡を取らなくなり、疎遠になってしまう場合がある。疎遠になるなら、表面的な繋がりでしかなかったということになるのではないだろうか。私たちは素の自分をさらすことができる相手を選択するが、結局深い部分までは信頼関係が高くても、他人にはさらけ出すことは難しいと考えた。」

「我々は普段から知らない人やあまり話さない人と関わる機会が増えている。講義でも少グループに分かれ、話し合うこともあるが、やはり第一印象を気にすることはあり、相手に合わせがちになる。相手にどう見られるか、どう思わせるのか、そういったことはこれからも考えていくのだろう。しかし年齢によって考え方は違うのか、疑問であった。今現代の若い人は、相手からの見方を気にするが、年齢が重なっていくごとに、そういったことには気にしているのか。若い人だけがそうなのか、気になることもあった。」

「グループが違えば違う県、クラスが違えば違う国であることが問題だと思わない。それぞれがそれぞれに合う形、環境で生きていき、時には違う県、国同士が仲良くすればいいのだ。全員と分け隔てなく仲良くするのは不可能である上に、普段一緒にいない人と関わらなくてはいけない時、いざ関わろうと思った時に関わればよいのではないだろうか。」

「福重氏が述べるように、単に友人関係が希薄化しているのではなく、コミュニケーションツールが増えるなどして、人との接し方が昔と現代とでは全く別物になってしまったのだと思う。マイナスな面を取り上げようと思えばたくさんあがるが、浅く広く付き合う若者の友人関係は賢く、逆により個人として生きているような気がするのは私だけだろうか。何をどう頑張っても結局は自分一人きりで生きなければならないことをわかった上での行動だと思う。」

「私は仲良くなりたい人には、ストレートに気持ちをぶつけて否定的な事も言うけれど上辺だけの付き合いの人には否定的な言葉を避けている派の人間です。授業内でもあがっていましたが、このようなコミュニケーションの取り方をしているのは若者特有というよりは私達より年上の人もそうだと思います。むしろ視野を広げれば日本人特有のコミュニケーションの取り方なのではないかと思いました。」

「日本の友人関係はよくわかりませんが、中国では普通の友達でも言いたいことは、気をつかずに言います。いわゆる「ノリ」のようなことは、あまりないです。」

「確かに日本人の友達と何かを言う時に、ちゃんと「そうそう」、「うんうん」みたいな反応が来てくれるが、他の友達の全然違う意見も賛成する。そうしたら反対の意見をはっきり言ったほうがいいと思う。外国人にとっては理解できません。」

2. 確認：議論の方法 ——何を話せばいいのか（再掲）

筆者の主張（相手の発言内容）に対する

① 質問

- 言葉・用語の意味がわからない
- どういうことを云っているのかがわからない（説明があいまい、具体性に欠ける…）
- こういう理解でよいのか（説明が不十分なので精確に理解できない）

② 共感

- この主張、この指摘、この言葉はそのとおりだと思う。的を射ている。
- これと関連して、このような事例も挙げられる／こういう言い方もできる

③ 疑問・批判

- 根拠は？
- 5W2H
- こういうふうにも考えることもできるのではないか… etc.

cf. “5W2H” の発想（以下、たとえば）

When

- 昔からそうなのか
- その解釈は今もあてはまるか

Where

- どの社会・地域にもあてはまるか
- 全国一律にそうなのか

Who

- 誰にもあてはまることなのか
- 誰がみても、そういえそうか

What

- 何を云っているのか（正確な理解。著者が主張しているのはどのようなことか）
- 何に対してもあてはまるか

Why

- なぜそういえるのか（根拠）
- なぜその現象が起きるのか（原因）

How

- どんなメカニズムでそうなるのか
- どのように考えるべきか

ホントに？

- ホントにそういえるのか
- 解釈や根拠に誤りはないか

3. 新しい生徒たち

「オレ様化」現象

- 自己をほかの自己（他人）と比べて客観化することができず、自己の感覚に閉じこもる
- 学ぼうとしなくなった
- 自分を変えようとしなくなった（修業をして一人前のおとなになろうとしなくなった）
- 「まわり」や「社会」と調和しようとする努力をしないで、自分の判断に固執する

高度消費社会・高度情報化社会

さまざまなメディア（アニメ、漫画、テレビ、ゲーム、音楽…）・ファッション・商品（グッズ）
消費社会時代の「個」の意識・人間観・世界観を吸収
家庭・家族、地域社会、対人コミュニケーションの枠組み・質の変化

4. 変化の軌跡 ——生徒たちにとっての学校・社会

「農業社会的」段階（1945～1960年）

- 共同体的な精神風土と人間関係（都市においても地域的な共同性残存）
- 子どもたちの遊び：タテの年齢集団で集団遊び
- 学校が、家庭や地域に対して圧倒的な権威

「産業社会的」段階（1960～1975年）

- （家族・地域・学校などの）共同体的なものからの精神的離脱
- 子どもたちの遊び：同じ学年の子ども集団、外へ遊びに行かず室内遊び
- 学校の家庭・地域に対する権威、揺らぎ始める
- テレビ文化の浸透と社会生活・家庭生活の商品経済化（お金）→消費主体としての「個」の意識
- 社会への関心が希薄に。自分のこと（個人的な利害や関心）のほうが大切
- 市民的な公共性が立ち上がる前に、バラバラのむきだしの経済主体としての「個」が登場

「消費社会的」段階（1976年以降）

- 共同体的なものがほぼ消滅
- 学校の家庭・地域に対する権威、非常に不安定に

cf 1. 教室掃除のとき教師が机を運ぼうとすると…

農業社会的生徒：「先生、私が運びます」と自分で運ぼうとする

産業社会的生徒：教師と一緒に運ぼうとする、「先生がやっているんだから私もやらなくちゃ」と思う

消費社会的生徒：あまりやりたがらない。教師がやっても見ているだけ。「やりなさい」と言われてもちょっと体を動かすだけ（教師ともクラスの仲間とも共同性を感じていない）

cf 2. 授業中の私語

農業社会的生徒：全体に向かって「静かにしなさい」と言えば静かになった

産業社会的生徒：一部のおしゃべりを注意すれば、他の生徒たちもしゃべるのを止めた

消費社会的生徒：他の生徒が注意されても自分のおしゃべりにつながっていると思わないし、直接自分が注意されても私語の事実を否定したり、あるいは居直ったりする。事実関係よりもむしろ、「この私」の内面に勝手に介入されることのほうが問題？

5. 消費社会を生きる若者たち

学校のルールや決まり ← 「従うべきもの」という認識前提が不可欠

「個」の自立：

- この「従うべき」という姿勢が消えてくる
- ルールや決まりを受け入れるか否かを判断するのは、生徒の「この私」
- 公共的なあり方を回避しようとする構え

事例1（80年代以降の決定的変化）

トイレで喫煙していた生徒が教師によって現場を目撃され、生徒指導部に呼ばれた

本人：「タバコは吸っていない！」

事例2

ある女子生徒が試験中にカンニングペーパーを隠している現場を教員が目撃し、教員室に呼んだ

本人：「カンペは試験勉強のために作ったのであり、カンニングのためではない。それを使って答案を書いているのではない！」

学校や教員、親への対人感覚

共同体的関係（＝「贈与」的關係）

- 教師は生徒に対して、親は子どもに対して、一種の優先性（指導的立場）がある
- 「とにかく先生の指示には従うべき」
- 納得できないことでも、とりあえず従う／従うフリをする

↓

市民社会的関係（＝「商品交換」的關係）

- 消費主体（ものを買う者）として自立(?)する生徒・子ども
- 商品経済がそうであるように、人（売り手）と人（買い手）とはいかなる意味でも対等

- 相手が教員や学校であっても対等意識がベース。ひとりの個人対ひとりの個人として対峙
- 「教師 - 生徒」関係の否定
- 「先生の指示であっても、納得できないことには従わない」（「等価交換」の感覚）

人間観や世界観（自己イメージや他人への期待値）

- 「自分の判断、自分の価値判断は“客観的で正しい”」
- 「“自分がこう思うこと”は、“まわり”のみんなも思っているに違いない」という確信
- 自分自身を、「外」から他人の目で（客観的に）見る力を喪失
- 自分について「外」から批評されること、他人から介入されることへの忌避感・恐怖感
- 「私の考えについて、人からとやかく言われたくない」

⇩

主観と客観の識別

「個々人の判断は私個人のものであり、主観的な判断に過ぎない」

自己の相対化

「自分も考え方の間違いを犯す可能性がある」「もしかしたら自分の思い込みかもしれない」

比較による成長

「理想的人間像」による成長目標、自分と他人との比較による自己反省

6. 「自分らしさ」に加熱される社会

2つの対照的な見解

オンリーワン志向

e.g. SMAP「世界に一つだけの花」

- すべての人が生まれながらに自分らしさをもっている
- その自分らしさを大切にしよう
- No.1 を目指して争うのはやめよう
- みんな特別な only one

オンリーワンを称揚する風潮への批判

「俺は、ヌルイ奴とズルイ奴が嫌いなの。一番目指さない奴ってムカツクんだよね。自分は自分らしくあればいいなんて、ハナっから言い訳用意してる奴ら、ホント反吐がでるんだよね。…自分らしくあればいいなんてさ、限界まで目指した奴だけが最後に言えることでしょ。」（TVドラマ『プライド』主人公「里中ハル」の台詞）

- 自分らしさなどというものは、努力してはじめて手に入れることができるものだ

7. ジョチュウ批判

- 自己中心性やそれを助長するような風潮に対する批判
- 今日の若者は確かなアイデンティティを持たず、幼稚なエゴがむき出しになり自己中心的になっている

① 未熟な自己・幼児的万能感

現代の若者は、家庭環境の変化、消費社会化、情報化などによって、幼児期の過大な自己愛を適切に切り下げられず、未熟な自己や幼児的万能感を持つ者が多い

-
-

② 他者との不適切な関係

その自己愛を傷つけられまいと、引きこもったり逆に極端な行動で人びとの注目を集めようとしたりし、他者との関わりが希薄になるなどうまく関係を構築できない

-

③ 自己中心性と空虚な自己

現実との適切な接触を持ってないので、等身大の自分を見出せず、誇大な自己像に固執し、現実とのギャップに不満や不安をつのらせ、内面に空虚を抱えている

-
-

④ 無気力や感情の爆発

幼児的な自己愛が温存されてしまうため、不安な現実と接すると、不満や不安は増幅され、無気力になったり、些細なことで爆発してしまったりする

-
-

8. 「自分らしさの檻」からの脱出

- 意外性に満ちた体験
- 異質な人びとと出会う体験 の積み重ね

↓

- 生きづらさと正面から向き合い、生きづらさを抱えながら生きていくこと

「私には、彼ら（彼女ら）は新しい経験を積んで自分が変わることを拒んでいるように思える。変わることは、失敗をして惨めな思いをしたり悲しくなったりすること。格好よく変わることは、ありえない。スムーズに変わることができるならば、実は何も変わっていないのだ。…ボロボロになりつつ新しいことを吸収していく人…」
(MSN マネー)

9. 考察

「オレ様化」現象

- 自己をほかの自己（他人）と比べて客観化することができず、自己の感覚に閉じこもる
 - 学ぼうとしなくなった
 - 自分を変えようとしなくなった（修業をして一人前のおとなになろうとしなくなった）
 - 「まわり」や「社会」と調和しようとする努力をしないで、自分の判断に固執する
-
- 自分について「外」から批評されること、他人から介入されることへの忌避感・恐怖感
 - 「私の考えについて、人からとやかく言われたくない」

「オンリーワン志向」

10. 参考文献

- 諏訪哲二、2005、『オレ様化する子どもたち』中公新書ラクレ
速水敏彦、2006、『他人を見下す若者たち』講談社現代新書
喜入克、2007、『高校の現実』草思社
浅野智彦編、2006、『検証・若者の変貌 ——失われた10年の後に』勁草書房、第五章
岩田考、2006、「若者のアイデンティティはどう変わったか」浅野智彦編『検証・若者の変貌』勁草書房
東浩紀、2001、『動物化するポストモダン ——オタクから見た日本社会』講談社
土井隆義、2003、『＜非行少年＞の消滅』信山社
芳賀学、1999、「自分らしさのパラドクス」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界 ——若者たちの東京・神戸 90's・展開編』恒星社厚生閣
影山任佐、1999、『「空虚な自己」の時代』NHK ブックス
香山リカ、1999、『＜じぶん＞を愛するということ ——私探しと自己愛』講談社現代新書
宮台真司、1994、『制服少女たちの選択』講談社
宮台真司、1998、「意味なき世界をどう生きるか？」藤原和博・宮台真司『人生の教科書 [よのなか]』筑摩書房
和田秀樹、1999、『自己愛の構造 ——「他者」を失った若者たち』講談社選書メチエ
上野千鶴子編、2005、『脱アイデンティティ』筑摩書房

MSN マネー (<http://money.jp.msn.com/newsarticle.aspx?ac=IT20100507003&cc=07&nt=00>, 2010/5/10)

11. 次回の予告

12月3日 社会への帰属と自由

以上

【授業 HP】 <http://t-enomoto.la.coocan.jp/komajo/>

【BBS】 <http://9021.teacup.com/tenomoto4/bbs>

① 未熟な自己・幼児的万能感

現代の若者は、家庭環境の変化、消費社会化、情報化などによって、幼児期の過大な自己愛を適切に切り下げられず、未熟な自己や幼児的万能感を持つ者が多い

- スキなことしかしない、キライなことはしない 感情がすべて
- 怒られるとすぐムツとする、へこむ

② 他者との不適切な関係

その自己愛を傷つけられまいと、引きこもったり逆に極端な行動で人びとの注目を集めようとしたりし、他者との関わりが希薄になるなど、うまく関係を構築できない

- キラいな人とは（ゼツタイ）口をきかない

③ 自己中心性と空虚な自己

現実との適切な接触を持ってないので、等身大の自分を見出せず、誇大な自己像に固執し、現実とのギャップに不満や不安をつのらせ、内面に空虚を抱えている

- 世界は自分を中心に回る？ 自分のことを客観的にみることができない
- 自己の不完全性・自分の欠点・「できない」自分を直視しない、認めたくない

④ 無気力や感情の爆発

幼児的な自己愛が温存されてしまうため、不安な現実には接すると、不満や不安は増幅され、無気力になったり、些細なことで爆発してしまったりする

- 過剰な自己卑下、“チキン・ハート”
- バッシングにはしる、イジメにはしる